

堺泉北港泉北6区緑地(3)

高石市に在住しております。再評価に当たりまして、このような場所から意見を述べる機会をいただきまして非常にありがたく思っております。

1983年5月に、泉大津市の泉北6区埋立地において開催されました水鳥観察会に初めて参加して以来、「泉大津に野鳥園をつくろう会」、そして「日本野鳥の会」に所属いたしまして、4年ほど前からは「日本野鳥の会大阪支部」の保護部で幹事としてもお手伝いさせていただいております。特に大阪湾岸でのカウント調査などを通じまして、「水辺」をテーマとした活動をさせていただいております。

シギやチドリといった水辺の鳥たちの渡来地をこれ以上失ってはならないということで、全国各地の湿地で観察を続けている方々の協力によりまして、約3年間なのですが、基礎データを集めるという「日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会」による全国調査並びに会合にも出席いたしまして、賛同し、協力させていただいてまいりました。

ここで、まず83年当時の雰囲気をお伝えしておきたいと思っております。

これは83年5月の第1回の観察会当時の干潟の様態です。多分、干潟を造成していただければ、このような様態ができるのではないかと思うのですが、手前の方には800羽ぐらいのトウネン、それと、若干、大きく点になって写っているのですが、40羽程度のオオソリハシシギというシギやチドリが飛来しておりました。

第1回の水鳥観察会で特徴的だったのは、メリケンキアシシギという非常に稀な水鳥がやっけてまいりまして、これ以来、約20年ぐらいバードウォッチングを続けているのですが、いまだに大阪湾で見つけることができていないという鳥が、非常に印象的でありました。それ以来、バードウォッチングを続けております。

この後にも、大阪で初めてこの地で見つかったオオチドリ等、今は「大阪の鳥記録委員会」というのも手伝わせていただいているのですが、この地は非常に稀な鳥がやってくる場所ということで、バードウォッチャーにも非常に魅力的な場所であったわけです。92年過ぎになると、ほぼ埋め立ても完了に近づいてまいりました。

これは、北の方を向いた写真なのですが、92年ぐらいのもので、実際に野鳥園の予定地というのはこちらになるのですが、最後の頃には、かなり水辺は残ったものの、本当に水鳥の飛来は少なくなってまいりました。

また当初に戻りまして、これも第1回の観鳥会の模様なのですが、当時、思い出に残っていることがあります。コアジサシという鳥がいるのですが、どれぐらいの巣の数があるかなということをお調べしたときに、当然、親鳥ですから、糞攻撃を浴びせられます。はたまた、シロチドリというのは、それも地面でひなを育てますので、入りましたら、擬傷という行為、要は自分はけがをしているんだということで、敵に対してけがを見せつけて、気を引いて、子どもを守る。そういうふうな親が子を守るという、非常に親子関係を見せつけられるような行動が見受けられました。

私自身も、この第1回の観鳥会というのは、父親と一緒にいったわけなのですが、昔の高石市や泉大津市には浜があって、海水浴を楽しんでいたんだよということを聞いておりました。親から子へ伝えるといいですか、何かそういうふうな印象的なものが残っていたこともあって、活動も続いているような状況です。

そこで、湿地保全ということで活動してきたわけですが、大阪湾にはたった2%しか自然海岸がないということで、なかったとしても、まだ1%くらいということでは、余り進んでいないのかなとは思いますが、関西国際空港のできる関係で、樽井の浜が埋まってしまったとか、そういうことも経験しておりますので、何か変化があるとなれば、非常に気になるところですが、最近では全国で湿地を守ろうとするような活動が活発化してきております。

先ほども申しましたが、「日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会」があって、約3年間くらいですが、カウント調査を実施しています。今日、お手元に配らせていただいたのは、実際の助松埠頭で数えられませんので、我々が活動を移している大津川のデータであるとか、内陸湿地である久米田池といった近隣のデータをお見せしております。

83年当時のデータと今は現状として違うとは思いますが、トウネンが約1,000羽、ハマシギが500羽、シロチドリが140羽という記録が自分の手元に残っているのですが、このデータというのは、有名なラムサール条約の関係で、国際湿地保全連合が発表している1%基準を用いることで、要は科学的なデータをもってその湿地の重要性をはかる尺度があるのですが、トウネン、ハマシギ、シロチドリ約1%レベルの羽数が、来ていればいいのですが、渡来しては飛んでいくということを繰り返しますので、その約4回分くらいの0.25%、要はこの東アジアの地域で生息している0.25%くらいの鳥たちが来ているのであれば、それが3種類ぐらい来ていれば、重要湿地として認められるというデータも出ていまして、実際、昔の助松埠頭はそのデータを満たしておった非常に重要な渡来地であった、ということが今になってわかったというような状況です。

今回造成していただけるであろう野鳥も憩える公園というのは、非常に小規模な場所でございます。ですから、あれもこれもといった環境を求めるのは非常に難しいと思うのですが、当然、鳥の渡り等ありますので、季節の移り変わり等に考慮したバランスのとれた湿地環境をぜひとも再現していただきたいと思っております。狭い湿地ほど外部の影響を受けますので、ぜひとも渡り鳥たちに安心して休息できる場を提供していただきたく、侵入防止対策等には万全な対策をぜひともお願いしたいと思っております。

今日、全世界ネットワークで結ばれておりまして、即時にコミュニケーションがとれる。何かが起これば、いろんな情報が電子メール等々で来るような時代になっているのですが、こういった技術がいくら進化しようとも、環境教育面等では、自らの力で飛んできた渡り鳥たちと、直接、実体験として学ぶことが一番心に残るものではないかと思っております。とにかくフィールドで体験するスリルほど心に残るものはないと思っております。

公共事業に対しては、自然再生型の事業に政府からも予算を重点配分するという形になってきております。ぜひともそのあたり、行政手腕を最大限に発揮して、補助関係も本年の6月中に決まるということですので、ぜひともご尽力の方をよろしく願いいたしたいと思っております。